スウィフトの生涯（XII）

アイルランド南部での暴動発生から ホワィトウェー夫人との出会いまで（1729～1730）

三　浦　　謙

1729年3月，マーケット・ヒルでの長期滞在を終えてダブリンに戻ったスウィフトは数日で軀の不調を訴えた。同年3月18日のチャールズ・フォード宛の手紙で「あなたのお手紙を受けとった時は，ツンボにいつもついて廻るめまいはまずまずでしたが，今はツンボが酷く往生しています…ダブリンへ帰って3日目で体調を崩しました」[1] といっている。

だが，周囲の事情はスウィフトに養生する暇を与えなかった。スウィフトが牧師館に戻ってみると，食糧不足と物価騰貴でとりわけ窮乏しているアイルランド北部への救援活動がダブリンで進捗していた。北部では種として蒔くべき燕麦を食用にして食べつくしていたので，広大な土地が荒地になりかねなかった。

ところが，豊かでもない南部の食糧が北部へ廻ればその分南部が苦しくなる。リマリック[2]，コーク[3]，ウォーターフォード[4]，クロンメル[5]，その他の南部の諸都市で食糧を北部へ廻すなという暴動が起きた。リマリックとコークが最も激しく，倉庫や地下室が打ち壊され放出された食糧には勝手な値がつけられた。

国外へ脱出する者はアルスターのプレズビテリアンが圧倒的に多かった。出国者の数は1728年から1729年にかけて4,000人，その翌年の春には20,000人の出国が予想された。ボウルター[6]は出国を止める法的処置を考慮する仕末だった。

こうした現状でもアイルランドの女性は輸入品嗜好が強く怠惰で奢侈に溺れていた。年間，ほぼ90,000ポンドの絹製品が輸入され，モスリンやオランダ布や亜麻布（キャンブリック）やキャラコに30,000ポンド以上の金

が費消され，女性の頭飾りに1ヤード10ポンドから20ポンドのレースが売られていた。

スウィフトはもはや匙を投げた。「未知の人からの書簡に答えて」[7] という一文を草して，スウィフトは絶望的な口調で次のようにいっている。

> この歎かわしい緊急な時機に毎日私に意見をもとめてくるききわけのない善意の人たちからの数々の手紙に私は疲れはてました。私はこれまでいろいろと手を尽してきましたが，すべて無益でした。コーヒーハウスでたまたま10人の人がこの私の回答を読んで，その過半数がことごとに私と気持を異にすればどうなるか。農民に種を蒔くことが許されず私たちの間で使う小銭の半ばが不在地主に支払う地代に当てられ，残り半分が女性が使用する贅沢な輸入品の購入に向けられるとしたら施す金がゼロになり私たちの慈善志向は無意味になります[8]。

このような厳しい情況でまず心掛けなければならないことは不要な輸入品の購入をできる限り控えることだった。したがって女性の奢侈がこのさい一番の障害になった。

スウィフトは「ダブリンの大主教への書簡」[9] と題する公開状でこの点を取り上げ次のように皮肉っている。

> アイルランドの女性はだれしも自国の製品はすべて軽んじてアイルランドから最も遠く隔った異国の製品をなによりも尊重すべきだと考えております。だから，その道の専門家が月の国を発見して，月世界への通行が可能になったら，アイルランドの女性は月の国から直接送られてくるもの以外は身につけようとはしないでしょう[10]。

1729年に始まって1730年代に最も数多く制作されたスウィフトの女性怨嗟の詩はこうした事態が背景になっていた。スウィフトは決して生来の女嫌いではなかった。

ここで1729年に書かれた「当世風女性気質」[11] という詩を紹介しよう。

この詩はカドリルというトランプ遊びに夜も昼もない当世風のモダンガールの暮らしぶりを描いている。彼女はカドリルで徹夜し昼頃起きて頭

痛を愬(うった)え眠気ざましにレモン水を飲み性懲りもなく今晩こそはと昨夜の仕返しを考える。クリーム入りのティーを飲みながら昨晩の不首尾を悔み悪態をつく。

場面が変ってレースとシルクを携えた商人が入ってくる。こちらが本物のインディアン・シルクでこちらが本物のマックリン・レース[12]といって買い気をそそる。1ヤード12ポンドもするレース選びに余念がない。レース選びがすむと，4時頃身仕度を整える。

やがて，トランプ仲間が集まりお茶を飲みながらのお喋りが始まる。

だれひとり片時も黙っていない。
だれもがお喋りに夢中で，相手の話しを聞こうとしない。
抱き犬(ラップドッグ)は吠えさせたままである。
その騒々しさはジンを飲みながら
大声で喋りまくる魚屋のおかみも顔負けである。
教師を締め出して教室へ入れようとしない学童も
これほど，のべつわめくことはない。
ガラクタ市の雑品も
これほどの雑音は立てない。
選挙の苦いビールで酔払った野次馬も
これに較べれば遥かに穏やかである。

(177—187)

ほどなく，従僕が呼びにきてカドリルのテーブルをしつらえた部屋に面々が集まる。始まれば鬱気は霧散して，またもや徹夜の体勢である。

ところが，カードを引いても引いてもツキがなく心臓の鼓動は高まるばかり。挙句は持ち金が底をつき嗅が煙草入れや指輪までも質に入れる。

夕食の時間になるとそそくさと食事を済ませて再びカドリルのテーブルにつく。今始まったばかりのような顔をしてトランプを続けるが，相変わらずスルばかりである。

霜のおりた早朝，4時を告げる夜廻りの声で，ようやく打ち止めとなる。

彼女は財布を空にし，またもな頭痛をうったえながら，連れ合いの眠むる臥床へ急ぐ。

こうした手合いの女性は夜食もつましく節倹につとめたステラとは大きく隔っていた。輸入品である年間90,000ポンドの絹製品と，30,000ポンドのモスリンやキャラコは国産品を毛嫌いする彼女らの需要だったのである。

ところで，スウィフトはこの時期大きな弔事に出あった。キング大主教の死である。1728年夏以降衰弱が激しくて歩行もままならなかったキング大主教は1729年5月8日ついに他界した。遺体はドニーブルック[13]の教会墓地に埋葬された。ダブリン・インテリジェンス紙は5月10日弔文を掲載して次のように大主教の死を悼んだ。

> 大主教は聖者として生き聖者として死んだ。葬儀費を捻出するために馬車と牛数頭を残しただけで，遺品の大半は慈善に向けられた[14]。

キング大主教の死に接してスウィフトがどんな感慨を抱いたか。それを伝える資料は今日残っていないが，数々の衝突はしたものの救国の同志を失った淋しさは痛切に感じとったにちがいない。

キング大主教が死んだ翌月の6月初旬，スウィフトはアチソン夫妻に招かれて再度マーケット・ヒルに向かった。マーケット・ヒルがたいへん気に入っていたスウィフトは今回の4ケ月にわたる滞在中にアチソン家の近くに土地を買いカントリー・ハウスを建てる気にまでなった。これは結局計画だけに止まったが，前回の滞在と同様今回もアチソン夫妻の暖いもてなしで，スウィフトは十分心身の保養に努めることができた。だが，スウィフトはその間ダブリンのことが気がかりでならなかった。1729年8月11日マーケット・ヒル滞在中，スウィフトはポープに出した手紙で次のようにいっている。

> アイルランドはここ3年ひどい食糧不足で，どこへ行っても乞食がうようよしています。食糧不足はアイルランドより恵まれた風土でも一般でしょうが，アイルランドの害悪はもっと根深いところにあります。国の収益の⅔が国外に流れ，残る⅓で海外との交易も許されず，矯慢な女が外国製品より優っている国産品をも身につけようとしない。そんな国を想像してください。アイルランドの実情は詮じつめれば以上のようになります。こうした弊害が日に日に募り，アイルラン

ドは全く壊滅状態です。私はこの点をこれまで10年間活字にして訴えてきました[15]。

ところが，効果がなく改善の跡はみられなかったのである。

10月8日，スウィフトがマーケット・ヒルからダブリンに戻った時，相変らず乞食が生きた幽鬼さながらに食糧をもとめて街をさまよっていた。だが，この中には貧窮から乞食に追いやられた者の外に怠惰から物乞いを職業としている者がかなりいた。1737年，スウィフトはダブリン全市の乞食にバッジをつけさせる案[16]を提案している。アイルランド全土からダブリンに乞食が流れこんできて，とても救済しきれないので，ダブリンの教区内の乞食に真鍮とか銅で作ったバッジを着衣の右肩とか左肩といった目のつく所につけさせる案である。これは11年前[17]からのスウィフトの腹案であった。ところが，これがなかなか効を奏さない。乞食は盗みや物乞いは平気だが，バッジを人に見られるのを極端に嫌がって，バッジをポケットに蔵いこんだり，肩に縫いつけたバッジをケープで隠したりした。スウィフトは街頭の乞食には一文の金もやらなかった。怠惰で妙に自負心が強い街頭乞食（ストリートベッガー）に代表されるこのアイルランド貧民の自己破壊的な特質はスウィフトをいらだたせた。スウィフトはイングランドの圧制に憤る以上にアイリッシュの怠惰を嫌悪した。

1729年10月，ダブリンでサラ・ハーディングの手で公刊されたスウィフトの破天荒な貧民救済案はこうした背景からの当然の帰結だった。正式には「貧民の子女を両親および国家の負担とならないようにし，かつ公益に沿うようにするための一私案」[18]で，広く「つつましやかな提案」[19]と略称されるこの救済案はダブリンの街衢（がいく）に群がる子供連れの女乞食の記述から始まる。腕に抱いたり，背負ったり，後にしたがえたりして一人の女乞食が3人，5人，6人と連れ歩いている夥しい数の子供たちは成人しても職がないために盗人になるか西インド諸島のバルバドス島[20]に身売りするかのいずれしかないのである。

だが，スウィフトの救済案の対象は乞食の子供のみに限られるのではない。その範囲は遥かに広く，事実上扶養能力のない親をもつ幼児全般におよんでいる。幼児というのは一歳児である。救済案の意図するところは，

この赤子を殺してその肉をもっぱら地主向けの食料とすることにある。地主階級はすでに貧民の親を数多く貧り食っている実績があるので，その幼児を喰う資格を最も具えているという。

一歳児に限った理由はいくつかある。

その1は生まれてから一年間の赤子は母乳が主なので，養育費はせいぜい2シリングあれば足りることである。年2シリング程度なら乞食稼業で埋合せができる。

その2は一歳でこの世から消えれば両親が教区の負担になることなく，子供自身生涯衣食の不足に苦しむこともなくなること。

その3は最も野蛮で非人間的な堕胎がなくなること。

その4は泥棒稼業は6歳までは無理で，それまでの見習い期間，金がかかること。

その5は生まれたばかりの赤子の目方は平均12ポンドだが，うまく育てると丸1年で28ポンドになる。それに一歳児がきわめて美味で慈養分に富むことである。

こうして地主階級を筆頭にダブリンの富裕な1,000世帯が幼児の肉を常時食卓にのせ，結婚式その他の祝宴でも調理されるとなると，スウィフトの計算では年20,000体が平らげられることになる。

スウィフトはこの新企画の救済案はアイルランド改革のための空しい提案を多年繰り返してきた挙句に思いついたので，反論が出るとは思えないといっている。子供6人の中5人が重荷（デッド・ウエイト）であって，当時のアイルランドの人口150万の中おおよそ100万の人間の姿をした畜類が悲惨な運命に見舞われるのは目に見えていたからである。

スウィフトはこの新提案執筆のかどで，これまで，しばしば冷血非道の犬儒家として非難されてきた。だが，この点にかんして，テムプル・スコットは次のように弁明している。「事情を弁えぬフランス人が誹謗するのならやむをえないだろうが，イギリス人が非難するとしたら，それは当時のアイルランドの実情を全く認識しないがためだ。スウィフトの正当性は歴史が証明している。今日，われわれがアイルランドの欠陥を正しく認識し，今日まで続いているアイルランドのイングランドへの敵意の実体を知るのにスウィフトの著作に優るものはないからである」[21]。

だが，新提案執筆当時のスウィフトの真意をなによりも代弁していると思われるのは，1731年1月スウィフトへの書簡の中で述べているボーリンブルックの次のことばであろう。

説教師や首吊り役人や寓話作家たちが悪を喰い止めたり悪がはびこるのを遅らせる程度のことはしておりますが，彼らがやっているのは人間性が容認する枠内でのことです。本物の改革は通常の手段では実現しません。本物の改革には教訓となるばかりでなく罰則にもなる異常な手段が必要です。国全体の腐敗は国全体の惨状によって浄化されなければなりません[22]。

1729年11月8日のダブリン・インテリジェンス紙に掲載された広告の冒頭で，「近年著しい祖国愛から生まれた」[23]と銘打たれたこの新提案はダブリンで刊行後，直ちにロンドンでも公刊されて，翌年ロンドンで3版を重ね，その後，ダブリンおよびロンドンで上梓されたスウィフトの著作集に繰みこまれた。大きな反響を呼んだからである。

さて，この時期デラニー[24]の紹介でスウィフトはピルキント夫妻[25]を識るようになる。後年，1748年から1754年にかけて3巻からなるスウィフトの想い出を書き綴ることになる妻のレティーティア・ピルキントンは医者の娘で，父親のジョン・ヴァン・ルウイン[26]はダブリンのトリニティ・カレッジでデラニーと同級だった。夫のマシューは1722年ダブリンのトリニティ・カレッジでB．A．をとり，1729年，彼が聖職禄を得る前，彼女が17歳の時に結婚した。

アイルランドの大立物ジョナサン・スウィフトにかねがね面識をもちたがっていたレティーティアは11月30日のスウィフトの誕生日の直前，デラニーを称える頌詩を書いてスウィフトに送った。スウィフトは翌月早々デルヴィル[27]のデラニー宅での夕食会にピルキントン夫妻を招待させた。ピルキントン夫妻は揃って子供ぐらいの背丈で，しぐさも子供じみていた。ピルキントン夫人を紹介されたスウィフトは「こんな小さな子供が結婚しているのか。早くからトラブルに捲き込まれて可哀想なことだ」[28]といったという。

ピルキントン夫人はその回想録の中で次のような逸話を伝えている。牧

師館の裏口にはいくつかの階段があって健康が思わしくなかったり天気が悪かったりして外に出られない時，スウィフトは運動のためその階段を勢いよく上ったり下ったりした。その折り，階段の下に従僕を一人控えさせてスウィフトが階段を何段上り下りしたか算えさせたりした。

ピルキントン夫人によると，スウィフトはけっして笑わなかった。笑いを誘うようなおかしなことが起きた時には，かみタバコを味わうさいに人がよくやるように，笑いを抑えるため，しばしば頬を吸いこんで凹ませた。

ピルキントン夫人はデルヴィルでのパーティは明るくて屈託がなくて，しかも品のいいパーティだったといっている。デラニーはスウィフトを丁重にもてなしたので，スウィフトはしばしばデルヴィルを訪ねた。

スウィフトはデラニーの紹介でピルキントン夫人の外，三人のインテリ女性と面識をもつようになった。その一人はサイカン夫人[29]である。富裕な食品商の妻で，詩のたしなみがあり読書好きだった。「プシュケー」[30]と題する短詩でスウィフトは彼女のことを次のようにいっている。

客を喜ばすためのご馳走の選び方を彼女は知っている。
彼女の味覚は彼女の機点と同じくらい洗練されていて，
よい友だちに感謝されるために彼女はマーケットを残らず調べあげる。
彼女がどんなに気を配るかを知ると嬉しくなる。
だが，いずれ，わかることだが，彼女の打つ手にはご用心。
客の耳を娯ませておいて彼女は食事の半分を節約するのだから。

（9—14）

サイカン夫人はスウィフトのお気に入りで，彼女が1730年イングランドに出向いた時には，ポープへの紹介状を書いている。

2人目はスコットランド人の書籍商の妻グリアソン夫人[31]である。彼女はヘブライ語，ラテン語，ギリシャ語，フランス語に通じ，テレンティウス[32]とタキトウス[33]の著作集を編集し夫に出版させている。

3人目はダブリンのキャペル・ストリート[34]に店舗をもつ反物商の妻バーバー夫人[35]である。彼女がスウィフトと識り合った時はすでに45歳で4人の子持ちだったが，いっぱしの女流詩人でその3年前にはアイルラ

ンド総督カータレットを称えるデラニー作の頌詩を出版している。

スウィフトは1729年2月6日のポープへの書簡で，ロンドンにこのような3人組の才女がいるかと自慢気に語っている。

1730年1月にはダブリン市長および同市議会が満場一致でスウィフトに名誉市民の称号を贈ることを決めた。3年がかりの懸案であった。名誉市民の表彰状を納めた当時の値で25ポンドほどの金の箱は10年後スウィフトが認めた遺書の中で，アレキサンダー・マコーレイ[36]に贈られている。マコーレイはアイルランドの主教区法院[37]の法官で，スウィフトの遺言執行者の一人であった。

スウィフトに金の箱が与えられたのを心よく思わぬ者がいた。その一人がアレン卿[38]である。当時，アレン卿は枢密顧問官の一人であったが，スウィフトがダブリンの名誉市民に選ばれたことをきくと，市の財政が貧しいのに，神を恐れず国王を尊重しない者に金の箱を授けるとは何事かといって激怒した。スウィフトとアレンの共通の友人であるロバート・レスリー[39]が2人の仲をとりなそうとしたが，スウィフトは腹の虫が収まらなかった。デラニーによると，アレンは狂人だと思えば同情しないでもないが，悪魔にとりつかれた人間だから排撃しなければならないのだとスウィフトは答えたという。

その言葉通り，スウィフトは4月15日，アイルランド国会が閉会になると，早速「トラウラス」[40] という戯詩を書いてアレンを攻撃した。トラウラスとはギリシャ語で舌がもつれるという意味である。アレンは生来吃る癖があった。詩の中でロビンという登場人物に次のようにいわせている。

吠えたてる野良犬は滅多に嚙まない。
スタッータッータッータッと吃るけれども
口を開けたとたんに吠えるだけだ。
言語障害があるのに，やたらに喋りまくる。

（46 — 49）

なにをいおうと狂気の沙汰だから，
味方にも敵にもなんの効き目もない。

（65 — 66）

1730年の夏，スウィフトは3度(みたび)マーケット・ヒルを訪れている。このさいはレイディ・アチソンと夫のの間に亀裂ができていた。夫のアーサー・アチソンは人との対話を好まず，スウィフトと話しをしている時も，口を結んで歌をハモッタり，指でトントンとテーブルを叩くくせがあった。乗馬も狩猟も，トランプ遊びもせず，スウィフトをウンザリさせる哲学的な思索を好んだ。社交的なレイディ・アチソンとの折合はよかったが，スウィフトは紛糾したアチソン家を避けてヘンリー・レスリー[41]宅に約半年滞在している。ヘンリー・レスリーは1688年の名誉革命後ウイリアム3世とメアリー2世への忠誠を拒否した英国国教会の聖職者の一人チャールズ・レスリーの子息で，スペイン人の妻とマーケット・ヒルに住んでいた。

この間，スウィフトが作ったいくつかの詩篇が残っている。その中の一つにイングランド北部に住まうあるレイディになり変って書かれた「主任司祭への頌詩」[42] というのがある。レイディ・アチソンの口吻でスウィフト自身が描いた自画像である。ここで，スウィフトは上流夫人に受けがよかった経緯(いきさつ)とか，会話の妙味とか諷刺詩(ランプーン)制作時の苦労話とかを次のように打ち明けている。

レイディの気持を摑むのがまことにお上手。
彼女らの機知と才能をこの上なく讃めそやす。
あなたに何度も讃められて
私の気持がどんなに高揚したことか！
あなたの確信に満ちたことばで，
私は若くして美しい才女に転身してしまった。

(11 — 16)

年齢と立場をよく考慮されて
激情に駆られて
いささかも，無礼な言葉を口にされることはなかった。
沈黙を破る時はいつでも，
口に出すことばを一つ一つ吟味し，
明瞭簡潔な言葉遣いなので，

聞き返したことは一度もない。

(68 — 74)

諷刺詩（ランプーン）制作の苦労は尋常でない。次のようにいっている。

気の利いた諷刺詩（ランプーン）に専念している時は
昼まで脳味噌をしぼる。
脳味噌が入り乱れて頭蓋骨の中をめぐっているうちに
膨脹して頭部の隙間を埋めつくす。
最初は泡しか出てこないで，
目まいがし，頭が割れるのではないかと思うが
四行絞り出せば
大方は苦労に報われたことになる。

(189 — 196)

1730年6月にはアイルランドのファーンズ[43]の主任司祭トーマス・ソウブリッジ師[44]が婦女暴行で起訴されるという事件が起きた[45]。ソウブリッジは1709年ケンブリッジのエマニュエル・カレッジを卒業してレスター州で3年間聖職に就いたが1715年に免職になった。その後，海軍やボムベイの東印度会社のチャップレンを勤め1729年ファーンズの首任司祭としてアイルランドに渡ってきた。そして，ほゞ1年後の6月2日スザンナ・ランカード[46]なる女性をダブリンで暴行したかどで起訴されたのである。ところが証拠不十分なため裁判は一週間延期され，一週間後も証拠が出されなかったため，結局ソウブリッジは放免された。

スウィフトはこの一件に関心をもって他の筋からも情報を集め，マーケット・ヒル滞在中の1730年8月オックスフォード伯ハーリーへの手紙で，「ソウブリッジは彼女を暴行した時，酔払っていたのだといっておりますが，彼は彼女を金で買ったのです。」[47] などといっている。スウィフトはその上，この一件を主題にしたバラッド[48]まで書いている。

バラッドは各節6行で12節から成っている。前半，後半要約すると次のようになる。

イングランド出身の聖職者がダブリンへ行く途中，チェスターに立ち
寄り，人妻にこがれて肘鉄砲をくらった。同じ人妻に再度挑戦，居合
せた連中に棍棒で殴られ，階段から蹴落された。
彼はダブリンへくると僧衣を着たまま平気で
淫売屋に行く．したたか酒を飲み，
淋病にかかったが，レイプはしなかった。
ところが，この彼がこともあろうにレイプを犯した。
淫売が安く買えるのに，なぜ危険を冒してレイプを犯したのか。

（Ⅰ～Ⅶ）

男色（ソドミー）で先年絞首刑になったアサートン主教[49]の
ように，彼はレイプで絞り首になるだろう。
イングランド出身の有能な主任司祭が
レイプで絞り首になれば野次馬達は
どんなに仰天することか。

（Ⅷ～Ⅻ）

レイプの当日，自分はダブリン市にはおらずウェックフォード[50]にいたのだといゝ，女を偽証罪で訴えるとソウブリッジは息巻いたが，この一件が決着をみぬうちに，1733年5月ソウブリッジは死んだ。

その後，平穏に日時が過ぎ，1730年の秋は，おおむね聖パトリック大聖堂で主任司祭としての業務に専念していたが，トーリーの機関紙「クラフツマン」[51] の11月7日号の次の一文がたまたまスウィフトを刺激した。

このような認可はアイリッシュが，これからもローマ・カトリック教徒でいることを奨励するようなものである。フランスとスペインで軍務に就けば十分な生活物資が支給されるのに，イングランドはアイルランドの人間をその軍隊に入れることを常に拒否し，イングランドの士官がアイルランドで徴兵することを厳禁しているからである……だが，イングランドの軍隊では原則的に無用とされている人間を国外に供給するこういった方法は肥らせて肉屋に売りつけることによってアイルランドの子供を飢えから救うという近年の方策[52]よりは慈善の

面からみてもいくらかましであろう[53]。

冒頭の「このような認可」というのはフランスが重ねて懇願していたアイルランドでの徴兵をジョージ2世が1729年認めたことである。これにより，数千名のアイルランドの若者がフランスで軍務に携わることになったが，イングランドにたいし，スペインも同じような要請をしてきた。また「アイルランドの子供が飢えさせないようにする近年の計画」というのは1729年のスウィフトの貧民救済案を指している。あの「つつましやかな提案」よりは慈善の点からみてもフランスやスペインで軍務に就くほうがましであるという言葉がスウィフトを刺戟した。

スウィフトは，たゞちに「クラフツマン紙への回答」[54] を書いて，おゝよそ次のようにいっている。

> フランスとスペインに6,000人の若者を送りだせば，衣食費1人あたま5ポンドとして年間3万ポンドの節約になる。3万，4万，5万のアイリッシュがフランスやスペインに渡り，フランス，スペイン両国が戦争でもすれば，アイルランドからの徴兵が次々と片づき，なんと大きな恩恵がアイルランドに与えられることか。
>
> このさい，1,700万エーカーのアイルランドの耕地をすべて牧草地に切り換え，8,400世帯に牧畜を営ませる。余剰人口はすべてアメリカ大陸のイギリス植民地その他いずれの国へでもイングランドと原住民との防波堤として送りだせばアイルランドの経済は安定してくる。

さきの「つつましやかな提案」に較べて荒削りで辛辣なブラック・ユーモアにも欠けるこのアイリッシュ貧民処理案はスウィフトの願いとは裏腹に存命中に公刊されることはなかったが，フランスに与えたアイルランド人徴兵許可が誤りであることに気づいたウォルポールは早々にフランスの徴兵士官を本国に召還させることに腹を決めた。ボウルター[55]は1730年12月上旬フランスの徴兵士官を本国へ早期に召還する件について，ウオルポールの指示でニューカッスル侯[56]から通達をうけていた。その約5週間後，フランス政府は徴兵担当官をすべて本国へ呼び戻した。

それから数ケ月後の1731年4月20日，ポープへの手紙でスウィフトは

「この国に住んでいない人間の想像を絶するほど，われわれは救い難い状態にあります……このことと老年と不安定な健康のため，私の気持は沈みがちです。ウェールズで牧師がやれたらとよく思います[57]」といっている。

「クラフツマン紙への回答」でのスウィフトの途方もない提案もスウィフトにとっては窮余の一策だったのである。

この頃，一人の女性がスウィフトと親しくなる。スウィフトの叔父アダム・スウィフト[58]の娘マーサ・ホワイトウェー[59]である。彼女はスウィフトの晩年，スウィフトにとって欠かせない存在になる。

ホワィトウェー夫人は1690年の生まれだからスウィフトよりは23歳年下で，2度結婚している。最初は牧師のセオフィラス・ハリソン師[60]。彼とはその後，離別し，1716年，エドワード・ホワィトウェー[61]と再婚した。彼女はダブリンのアーベイ・ストリートに住んでいたが，1730年クリスマスの頃，夫と死別する迄はスウィフトとの往来はなかった。

1735年スウィフトの忠実な家政婦ブレント夫人が死ぬと，その娘リッジウェー夫人[62]が後を継いだが，スウィフトは善良で慈善心の厚い従妹のホワィトウェー夫人の方を頼りにしていた。スウィフトは1737年4月自身の死後の跡始末をもホワィトウェー夫人に指示している。この点については章を更めて述べることにする。

注

(1) *The Correspondence of Janathan Swift*, Vol. Ⅲ, pp. 320－321.

(2) Limerick.

(3) Cork.

(4) Waterford.

(5) Clonmel.

(6) Boulter, High（1672－1742）.

ジョージ一世の即位以来，イングランドはアイルランドにおける利権拡大に努めた。ボウルターは1724年から1742年死去するまで，Archbishop of Armagh の要職にあり，教会・国政の両面において権勢をふるった。スウィフトもアイルランドのキング大主教もボウルターを嫌った。

(7) *Answer to Several Letters From Unknown Persons*（1729）.

(8) *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. XⅡ, pp. 80－81.

(9) *A Letter To The Archbishop Of Dublin, Concerning The Weavers*（1729）.

(10) Op. cit., Vol. XII, p. 67.

(11) *The Journal Of A Modern Lady* (1729).

(12) Macklin. レースの製造で有名な Machlin 社のこと．Mac*k*lin はスウィフトのミス・スペリング．
(*The Poems of Jonathan Swift*, Vol. II, pp. 443 - 453.)

(13) Donnybrook.

(14) *Swift*, Vol. III, p. 619.

(15) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III, p. 341.

(16) *A Proposac For Giving Badges To The Beggars In All The Parishes Of Dublin* (1737).
この中で次に挙げるようなスウィフトの指摘が興味深い。

i) 飢餓状態にある 20 人中の 19 人は運命でそうなったのではなく，酔払い，窃盗，詐欺につながる怠惰のためである。

ii) イングランドでは経済的に見通しのつくまで結婚しないが，アイルランドでは 2 人合わせても披露宴用の 1 パイントのバター，ミルクも買えないような連中が結婚している。

iii) イングランドの人間 1 人の値打がアイルランドの人間 12 人の値打に相当する。

iv) ダブリンの商店の店主は乞食を店先に屯させている。客 1 人に乞食 50 人の勘定だ。多くの客は乞食を見るのが嫌で他の店に行く。

v) スウィフトは救貧院の実情を調査する委員会のメンバーになったことがある。そのさい，慈善金で暮らすことになる者はその後も慈善金を当てにして働こうとしないことがわかった。

vi) 乞食の放浪性は厳しく罰すべきだ。更生は 20 人に 1 人いるかいないかである。

vii) 乞食は夜食に頓著しない。欲しがるのはブランデー，エールその他の強いアルコールである。アルコールは金がなければ飲めない。金は都会にある。乞食がダブリンに群がるわけである。

(17) ほぼ 11 年前の 1726 年 9 月 26 日牧師館から出した宛先不明のスウィフトの書簡の中で，この問題に言及している。

(*The Prose Works of Swift*, Vol. Ⅶ, pp. 326 - 327.)

(18) *A Modest Proposal For preventing the Children of Poor People from being a Burthen to thier Parents, or the Country, and for making them Beneficial to the Publick* (1729).

(19) *A Modest Proposal.*

(20) Barbados. 西インド諸島東端。

(21) *The Prose Works of Swift*, Vol. Ⅶ, Introdnction Ⅺ-ⅩⅥ.

(22) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. Ⅲ, p. 438.

(23) *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. Ⅻ, Introduction xix.

(24) Delany, Patrick (c. 1685 - 1768). Chancellor of St. Patrick's, Dean of Down を勤める。

Observations upon Lord Orrery's Remarks on the Life and Writings of Dr Jonathan Swift (1752).

(25) Pilkington, Matthew (c. 1701 - 1774). Pilkington, Laetitia (1712 - 50). *Memoris*, 3 vols. (1748 - 1754).

(26) Lewin John Van. 生歿年未詳。

(27) Delville.

(28) *Swift*, Vol. Ⅲ, p. 639.

(29) Mrs. E. Sican. 生歿年未詳。

(30) *On Psyche.*

(*The Poems of Jonathan Swifts*, Vol. Ⅱ, p. 580)

プシュケーはキューピッドに愛された蝶の羽をもつ美少女。

(31) Grierson Constantia. 生歿年未詳。

(32) Terence (190? - 159 B.C.).

ローマの喜劇詩人，カルタゴに生まれ，奴隷としてローマに連れ去られるが，後ラテン喜劇の大家と目されるまでになる。

(33) Tacitus (55? - 120).

ローマの歴史家，政治家。79年検察官（クアエストル），88年プラエトル（執政官に次ぐ高級行政官），97年執政官（コントル）．主著 *Historiae* は皇帝 Galba, Otho, Vitellius, Vespasian, Titus, Domitian の治世を扱う。

(34) Capel Street.

(35) Barber Mary, (c.1690 - 1757).

(36) McAulay, Alexander. 生歿年未詳。

(37) The Consistorial Court of Ireland.

主教任命の法官が司る宗教法廷。

(38) Allen, Joshua, 2 nd Viscount (1685 - 1742).

(39) Leslie, Robert. 生歿年未詳。

(40) *Traulus* (1730).

(*The Poems of Jonathan Swift*, Vol. III, pp. 794－801)

(41) Leslie, Henry. 生歿年未詳。

(42) *A Panegyrick On The Dean in the Person of a Lady in the North* (1730).
(Op. cit. pp. 886－897)

(43) Ferns. アイルランド東部 Wexford 郡にある村落。

(44) Sawbridge, Thomas (d.1733).

(45) 次のような各紙で報ぜられた。
The Grub-Street Journal（6月11日).
The British Journal（6月13日, 6月27日).
Daily Courant（6月16日, 6月23日).
Daily Journal（6月16日, 6月23日).
London Evening Post（6月16日).
Applebee's Original Weekly Journal（6月20日).
Daily Post-Boy（6月23日).
The Weekly Journal（6月26日).

(46) Runcard Susanna. 生歿年未詳。

(47) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III, p. 405.

(48) *An Excellent New Ballad: Or, The true English Dean to be hang'd for a Rape* (1730).
(*The Poems of Jonathan Swift*, Vol. II, pp. 516－520)

(49) Atherton, John, Bishop of Waterford and Lismore (d. 1640).
1640年ダブリンで罷免され絞首刑になった。

(50) 既出。cf. 注 (43).

(51) *The Craftsman*. Nicholas Amherst 編集で William Pulteney の指導をうけて1726年に創刊。Walpole の政策を批判した。最初の半年間は週2回刊行された。1727年5月13日からは, タイトルが *The Country Journal ; Or, The Craftsman* に変った。

(52) *A Modest Proposal* を指している。

(53) *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. XII, pp. 316－317.

(54) *The Anster to The Craftsman*. op. cit. pp. 173－178.

(55) 既出。注（6).

(56) Newcastle, Thomas Pelham-Holles, Duke of, (1693－1768).

(57) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III, p. 458.

(58) Swift Adam, (1642－1704).
スウィフトの叔父。スウィフトの祖父 Thomas Swift の6番目の息子。

(59) Whiteway, Martha (1690－1768).

(60) Harrison, Theophilus.

(61) Whiteway, Edward.

(62) Ridgeway, Anne.

(60), (61), (62) 生歿年未詳。

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).
Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D.D.* (London, 1908).
Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D.D.* (*Edinburgh,* 1824).
Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).
Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).
Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).